

ろう学校における道德教育の実践

志観寺 由貴¹⁾

I ろう学校とは

ろう学校には聴覚に障害がある幼児・児童・生徒が通学している。そのため、ろう学校の幼児・児童・生徒たちは手話や指文字、聴覚活用や口話などを組み合わせてコミュニケーションをとっている。指文字は、手指の形により五十音を表すものであり、拗音、促音、濁音及び長音などをその動きによって表現することができる。コミュニケーションにおいては、固有名詞や日本語の単語を直接的に伝え表現する場合や助詞を表現する場合などに用いられる。手話は、ものの形や動き、字の形や状態などの特徴をとらえて、顔の表情などとともて手の形や動き、位置、向きなどによって意味を空間に描き出す言葉である。書記言語はないが、目で見る言葉として即時性に富み、事物や動作の具体的表現に優れており、聴覚活用し難い人にとっても分かりやすく心理的安定も得られやすい（全国聾学校長会専門性充実部会、2011）。

ただし、ろう学校に通っているからといって全員が初めから手話や指文字が堪能なわけではない。ろう学校の中学部に入学してきた生徒のなかには、幼稚部・小学部とろう学校に通っていた生徒もいれば、地域の小学校の普通学級や難聴学級に通っていた生徒もいる。発声がなく手話や指文字でのコミュニケーションを主とする生徒もいれば、入学時には口話優位で指文字も手話もできない生徒もいる。聴覚活用の状況も生徒によって幅が広い。そのため教員は発声や口形、手話や指文字、板書など、いろいろな手段を組み合わせて生徒と伝え合うとともに、生徒同士のコミュニケーションの支援も状況に応じて行っている。

読解力に関しては、文章から内容を読み取るこ

とが得意な生徒もいれば、手話や話し言葉で伝え合うことは得意だが文章から意味や状況を読み取ることが苦手な生徒もいる。作文力に関しても、正しい日本語で文章を書ける生徒もいれば、助詞を間違える生徒もいるし、文法的な間違いは多いが、雰囲気の意味を汲み取れる程度の文章を書く生徒もいる。

本授業を行ったクラスの生徒もこれら日本語の力に差があり、手話で言われている内容が分かっていても本当の意味を理解するまでに時間がかかる生徒や、質問の意図を理解し正対した答えを言うことが難しい生徒が在籍している。

そのような中で、現在道德教育は、「子どもが命の尊さを知り、自己肯定感を高め、他者への理解や思いやり、規範意識、自主性や責任感などの人間性・社会性を育む」（教育実行再生会議、2013）ことを念頭としている。先の特性を有するろう学校においても道德教育を推進するためには、一人一人の生徒の実態を把握した上で、教育を施さなければいけない。

こうした背景から、本稿では、生徒個々の特性に配慮しながら展開した、ろう学校における道德教育の実践を報告する。

II 授業設定の理由

本授業の中学校学習指導要領上の位置付けは、四つの視点の中の「B主として人との関わりに関すること」の、「(8) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。」（文部科学省、2015）に該当する。

1) 前任校＝東京都立中央ろう学校 現在＝東京都立葛飾特別支援学校

該当内容が展開された授業の対象者は、都内に設置されるろう学校の中学3年生(男子3名, 女子3名)である。

中学生になると、互いに心を許し合える友達を真剣に求めるようになる。しかし中学生にとって友達との関わりは難しいと感じるテーマの一つであり、相手のことを心から信頼できる友達関係が望まれるところであるが、その関係の構築は容易なものではない。今回の授業を行ったクラスの生徒も、一定の友達関係はできていたが、一部の生徒だけで話をしたり、仲の良い友達とだけ行動する様子が見られた。また普段は仲が良さそうにしている、ささいなことで喧嘩をして話さなくなることもあった。表面的には仲が良い様子が見られるが、信頼関係で結ばれているとは言い切れない実態があった。その要因の一つには真の友情についての理解が十分でないことがあると考える。真の友情は表面的な仲良しではなく、いつも近くにいることでもなく、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がその根底にある。また相手の人間的成長を願い、励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという関係である。

このような生徒の実態を踏まえ、「ないた赤おに(浜田廣介, 2005)」を題材に、主人公の赤おにとつて本当の友達は誰であったのかを考えることから、信頼という目には見えない心のつながりがそこにあるか、自分にとっての真の友情とはなにかを考え、自分の友達との関わり方を振り返ることをねらいとした授業を設定した。

Ⅲ 授業展開の工夫

本授業では導入で本時のねらいである「本当の友達ってなんだろう?」というテーマを生徒に投げかけた。そうすることで、授業前に生徒が思っている「友達」についての考えを確認することができる。また生徒がどこに主眼を置いて物語を読めばいいのか、軸がぶれることなく授業をすすめることができると考えた。そして教員も想定外の生徒の発言によって本時のねらいがそれることなく授業を展開しやすくなる。

展開の前段では、赤おにの気持ちの変化を考えながら物語を読むために、心情円盤を一人一台用

意して活用した。心情円盤とは登場人物の気持ちの揺れ動きを円グラフで表現できるようにしたものである。今回はオレンジが嬉しい・楽しいなどのプラスの気持ち、水色は悲しい・寂しい・怒っているなどのマイナスの気持ちを表すようにした。

心情円盤を使用するメリットには第一に生徒の言語力の差に関係なく、全員が平等に自分の意見を発表しやすいことがあげられる。オレンジが100%で完全に嬉しいのか、水色が100%で絶望しているのか、オレンジが80%の水色が20%で嬉しいけど後ろめたい気持ちもあって喜びきれないのかなど、赤おにの気持ちを色の割合によって表すので、言葉や文章では伝えにくい微妙なニュアンスなどを視覚的に表現することができる。視覚情報として自分の考えを相手に伝えることができるため、言葉で表すことが苦手な生徒にとって、自己表現を手助けする有効な道具となる。また発表を聞く生徒にとって、色を見ただけで感覚的にわかりやすくなるというメリットもある。

第二に、その場面での赤おにの気持ちを一斉に出せることで他者の意見に左右されず、生徒自身の意見を発表することができる。順番に意見を発表する方法だと、前の人の発言に影響を受け自分の意見を変えたり、仲の良い友達と同じ意見に合わせようとしたりすることがある。しかし全員が一斉に自分自身の考えを発表することで、友達に合わせるのではなく自分で考えようと思える環境を整えることができる。

第三に、全員の活動量が確保でき、さらに受け身ではなく主体的に授業に参加しやすくなることである。他者の発表を聞くだけでも、多様な考え方を知るという活動は確保できるが、受け身的にただ聞いているだけになってしまうこともある。また発言の多い生徒の意見だけで授業が進んでしまい、特定の生徒だけが考え、他の生徒の活動量を十分に確保できないこともある。そこで心情円盤を一人一台持ち、自分が考えた赤おにの気持ちを表わしてから友達の意見を聞くことで、色の割合が異なった友達の意見と自分の考え方をわかりやすく比較できる。また同じ色の割合で示した友達でも考えた理由が違うことを知ることができる。このように心情円盤を一人一個準備し、自分

の考えを手元をもって授業に参加することで、常に自分の意見と友達の意見を比べながら聞けるようになり、主体的に授業に参加できる。

本授業では物語を読みながら内容を確認するとともに、場面ごとに変わっていく赤おにの心情の変化を考え、生徒全員が自分の意見を発表することによって、友達の考え方や感じ方を共有できるようにした。

物語を読みながら内容を確認するといっても、先に述べたように生徒の読解力の差がとても大きいため、本を生徒に渡して各自で読むようにしても、内容や主人公の心情の変化を感じとりながら読めるとは限らない。そのため本授業では本文をそのまま読むのではなく、絵本の絵を電子黒板に映し出し、教員が本文をわかりやすく要約して伝える読み聞かせの方法を選んだ。この方法を用いることで、生徒の読解力に関係なく、クラス全員で一緒に物語を読み進めるようにした。

また物語を細かく分け、その場面での赤おにの気持ちを想像し発表させることで、生徒一人一人がどのように内容を理解しているか、教員が確認しながら授業を進められるようにした。具体的には、

- ①村人と仲良くなりたくて、お茶会に誘う立て看板を作った時
- ②立て看板を見た村人に、見た目で怖がられて逃げられてしまった時
- ③青おにが村人を襲い、赤おにが退治することで、村人に赤おにはいいやつだと思われるようにしようと、友達の青おにから提案された時
- ④実際に青おにが村人の家を襲い、赤おにが青おにを叩いて退治している時
- ⑤村人が赤おには優しい性格だと知り、一緒にお茶会をするなど赤おにと村人が友達になれた時
- ⑥赤おにが久しぶりに青おにの家に行くと、青おには赤おにのことを考えて、遠くに旅立ってしまっていた時

の6つに分けて、読み進めた。

すると、①の場面では、オレンジが100%で「わくわくして楽しみ」と答える生徒がいる一方で、オレンジも水色も50%で「村人と仲良くなりたいが、本当に家に来てくれるかわからないから不安」と答える生徒もいるなど、生徒によって

考え方の違いをはっきりと示すことができた。

②の場面では、ほとんどの生徒が水色を大きく出したが、「逃げられて悲しい」だけでなく、「見た目だけで逃げるなんて腹が立つ」と怒りを表す生徒もいて、マイナスの気持ちが大きいのは同じだが人によって感じ方が違うことを全員で共有することができた。

③の場面では、意見が大きく分かれた。オレンジを大きく出し「村人と仲良くなれるチャンス」という生徒もいれば、水色を大きく出し「元々友達の青おにを悪者にしてまで、村人と仲良くなりたいのか？」と自分の気持ちに問いかける生徒もいた。またオレンジと水色を同じくらいにして「村人と仲良くなりたいのは確かだが、友達の青おにを傷つけるのは嫌だ」と気持ちの揺れを表す生徒もいた。

④の場面では、水色を大きく出す生徒が多く、「演技だとしても友達を叩くのは嫌」と青おにに対しての罪悪感を述べる生徒や、「こんなことをしてしまったが本当に良かったのだろうか？」と気持ちの葛藤や、やってしまったことへの後悔を表す生徒もいた。一方で、水色よりもオレンジを少し大きく出し「これで村人と友達になれるかもしれない」と期待の気持ちを示す生徒もいた。

⑤の場面では、オレンジを大きく出す生徒が多く、「村人と友達になれて嬉しい」と喜びを表す生徒がいる一方、「青おには元気だろうか？村人とは友達になれたが本当にこれで良かったのだろうか？」と迷いを示す生徒もいた。

⑥の場面では、水色を大きく示す生徒が多かった。理由は「青おにを追い出してしまったようで申し訳ない」という青おにへの懺悔の気持ちと、「勝手に黙っていなくなるなんてひどい」という怒りの感情に分かれた。またオレンジを出した生徒からは「僕のためにそこまでしてくれてありがとう」という感謝の気持ちも出てきた。

以上のように同じ物語を読んでも、一つの物語に対して考え方は一通りではなく、自分と友達の感じ方は違うことを生徒同士が知り、驚いたり納得したりしている様子が見られた。

展開の前段で物語の内容を確認し、場面ごとの赤おにの気持ちの変化を生徒全員で共通理解した後、展開の後段では本時のテーマであった“本

当の友達とは？」という発問をもう一度生徒に投げかけた。

まず「赤おににとって、本当の友達是谁だったのか？」という発問をすると、様々な意見が出てきた。青おにが本当の友達だと考えた生徒は、「自分を犠牲にしてまで、赤おにの願いを叶えてくれた青おにが本当の友達だ」と発表した。村人が本当の友達だと考えた生徒は、「初めは見た目の違いなどで怖いと誤解されたけど、今は優しいとわかってくれたし、毎日遊びに来てくれたりお茶会をしたり、赤おにを受け入れてくれているから村人も本当の友達だ」と発表した。また、「青おにがいなくなることで赤おにが悲しむとわかっていたのに、黙っていなくなった青おには赤おにを傷つけたから本当の意味では友達ではない。村人もお菓子が食べたいからお茶会に来ているだけかもしれないし、信用できないから本当の友達ではない。」と発表した生徒もいた。この発問によって、自分が本当の友達に求めていることを考えられるようにした。

次に「青おにはどうして悪役になったり、黙っていなくなったりしたのか？」という発問をし、青おにの立場から考えるように促した。この発問によって青おにが赤おにのことを本当の友達だと思っていたからこそ、「赤おにの願いを叶えてあげたい」と考え行動したことに気づけた生徒が多かった。

そして「あなたにとって本当の友達とは？」という、本時の中心発問をした。まず個人で考え、その後に隣同士の生徒で話し合い活動を行った。すると「ずっと一緒にいてくれる人」や「優しい人」など抽象的に考える生徒と、「初めは雰囲気怖くてなかなか話しかけられなかったけど、一度話してみると面白くて、今はなんでも話せる友達」や「入学してすぐの時は緊張していて友達ができなかったが、そんな時に明るく話しかけてくれて、優しくしてくれた友達」など、自分の体験と結び付けて具体的に考える生徒がいた。この発問によって、物語の中で赤おにを軸に考えていた友達の意味を、実生活に結び付けて自分にとっての友達とは何かを考えられるようにした。

終末で「自分が相手にとって本当の友達になる

ために、自分にできることは何か？」という発問をした。すると、「友達の気持ちを考えて行動したり、話したりする」「友達を裏切るようなことはしない」「困っている時に優しくする」など、具体的に今の自分には何ができるのか、友達と付き合うために気を付けることは何かなど、一人一人考える様子が見られた。最後に、今の自分は本当の友達になるための努力ができているのか投げかけて授業を終えた。

IV 道徳の授業で大切だと考えること

今回の授業のように、1つの物語を取り上げただけでも考え方や感じ方は生徒の数だけある。その中には教員が想定していなかった意見や、一般的には道徳的ではない意見ももちろん含まれる。例えば、赤おにが青おにを叩いている場面では、教員としては罪悪感や後悔の念をもってほしいと考えるだろうし、生徒からもそのような意見が出てくると想定することが多い。しかし実際は、村人と仲良くなれることに対する期待感を大きくもち、青おにのことはあまり考えていない生徒もいる。このような意見も生徒の正直な意見であり、絶対に否定してはいけないと気を付けている。道徳心とは教員などの大人が一方的に押し付けるべきものではなく、生徒が自ら考え自ら育てていくものだと考える。また生徒には、常に多様な考え方をもち、どのようなことも受容できる大人になってほしいと願っている。そのためにも、生徒からどのような意見が出て教員は受け止め大切にし、その上で友達や教員の意見を伝え、生徒自身が考えを深められるような機会を準備することが、道徳の授業では求められていると考えている。

引用文献

- 全国聾学校長会専門性充実部会 (2011), 『聾学校における専門性を高めるための教員研修用テキスト 2011年改訂版』72ページ。
- 教育実行再生会議 (2013), 『いじめ問題等への対応について』, 2ページ。
- 文部科学省 (2015), 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』。
- 浜田廣介 (2005), 『ないた赤おに』, 金の星社。